石川県立美術館だより

第348号　平成24年10月1日発行

BIJUTSUKAN DAYORI

須田国太郎 「犬」　東京国立近代美術館　－須田国太郎展－

当館企画展

須田国太郎展 －没後50年に顧みる－

特別陳列

尊經閣文庫名品展 －職人歌合の世界－

秋の優品選

－琳派を中心に－

知られざる鴨居 玲

当館企画展

須田国太郎展
－没後50年に顧みる－

主催／石川県立美術館、日本経済新聞社　特別協力／京都国立近代美術館

9月1日（土）～10月14日（日）　会期中無休

前号で、七つの章に須田展は構成されていると述べました。第7展示室に第一章【渡欧前】、第二章【渡欧・模写】、第三章【第1回個展から大戦へ】、第8展示室に第四章【山間風景】と第五章【動物と花の描かれた風景】の前半、第9展示室に第五章の後半と第六章【人里の風景】と【スケッチ】に区分した作品を展示しています。

人によって思いは様々でしょうが、圧巻は第7展示室との声が多いようです。主に二十代から四十代半ばまでの作品がずらりと並んでいます。スペイン・プラド美術館でのグレコやティツィアーノ、ティントレットの大きな模写、四十一歳で開催した初個展出品作、そして独立美術協会会員となって発表した大作など、渋い色調と造形に魅了されます。「本物の絵を見ている」という思いがします。

この緊張感に溢れた第7展示室を出て、第8展示室に入ると、一転伸びやかな気分になります。山なみを描いた風景は、印象派の画家が時間を変えて描いた連作を思わせますし、「犬」や「鵜」などの動物の代表作は、神秘的であったりユーモラスであったりもして、黒と白とが美しい戦後の須田の新しい作風を感じさせます。

第9展示室の最後のコーナーからは、須田の執念を感ずるのではないでしょうか。「ある建築家の肖像」は、スペインの天才建築家ガウディと彼の不思議な建物が描かれています。もう一度画家としてスペインに行って勉強したいとの思いを、須田は常々周囲に語っていました。それは病床にあっても同様で、特殊なイーゼルを持ち込んで、油絵を描き続け、昭和三十六年十二月十六日、七十歳で亡くなったのでした。

一　般	一、〇〇〇円（八〇〇円）
大 学 生	六〇〇円（五〇〇円）
高中小生	三〇〇円（二〇〇円）

※（　）内は二〇名以上の団体料金

山羊と木蓮

ある建築家の肖像

1F企画展示室

学芸員の眼

須田の戦前の絵は赤を強く感じます。この赤褐色の色調は、古典の模写から来ていると思われます。バロックの画家達はキャンバスに施した下地に褐色を塗り、線描でデッサンした後、明るい部分と暗い部分を大きく塗り分けて、明暗とボリュームを出し、その上に色彩を施していきました。

パレットが木製で茶色をしているのは、キャンバスに施した褐色の上に絵具を塗っていく際、色味を確認するのに適っているからです。

須田は美術史家としてヨーロッパの絵画史を学び、画家として模写を通じ古典の技法、つまり、油絵は幾重にも絵具の層が重なってできるものであること、重層的構造を持った平面であることを学んだのでした。後年の擦ったり引っ掻いたりした須田の画面が美しい絵肌を見せているのは、しっかりと絵具層が重なっているからこそといえるでしょう。

前田育徳会
尊経閣文庫分館

特別陳列

尊経閣文庫名品展
－職人歌合の世界－

9月1日（土）～10月21日（日）　会期中無休

三代藩主前田利常は『七十一番職人歌合』と同じように、後水尾院より贈られた作品があります。その中でも重要なものが『天神画像』と『忍』の二幅です。いずれも後水尾院の宸筆で、前者は小松天満宮建立の際に贈られたもので、学問や芸道の神様である『天神画像』に、前田家の祖先として崇拝する菅原道真（天神）の歌とされる「心だにまことの道にかなひなば　祈らずとても神や守らむ」が記されています。後者は、文字通り幕府の政治的圧力を耐え忍ぶという天皇の心境を伝えるもので、同じ心境の利常への深い配慮を感じさせます。

後水尾院と利常は、徳川二代将軍秀忠の姫をそれぞれに入内・輿入れという関係に象徴されるように、徳川幕府の政治的屈従を強いられた立場にありました。後水尾院は禁中並公家諸法度の制定などによる制約のなかで、学芸に専念させられたことを逆手にとり、天皇家は文化の最高権威者であり、文化そのものの体現者であるとする考え方を推し進めていくのでした。

一方の利常は、そのような後水尾院を中心とした宮廷文化サロンの人々との交流の中で、文化政策を推し進め、加賀藩の文化を築いていくことができました。

このような点から、現在公開中の『七十一番職人歌合』がいかに前田家にとって重要であったかが認識いただけたことと思います。さらに、この歌合を利常が瑞龍寺に奉納しました。利常は二代利長の菩提寺として瑞龍寺を建立し、利長の月命日には様々な品を奉納していますが、異母兄である利長への畏敬の念を感じ取ることができます。

七十一番職人歌合（下巻）【部分】江戸時代　17世紀

学芸員の眼

この歌合の序は、次のような古今集仮名序を想起させるはじまりとなっています。

「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、…生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、…男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。」そして、職人語彙を用いながら、情緒的な世界を詠んだ歌を評価（判定）している点に、こうした伝統が反映されています。なお、最後の七十一番に「酢造・心太売」が配されていますが、酢を「あまり」とも呼ぶことから、七十番の歌合に「余り」として追加する構成となっています。心太（ところてん）に酢をかけて食す事からこの組合せになっているようですが、こうした点にも豊かな言葉の世界が認められます。

第２展示室

秋の優品選
－琳派を中心に－

9月1日（土）～10月21日（日）　会期中無休

前回は、本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳についてお話ししましたが、今回は、宗達の様式を継承した俵屋宗雪と喜多川相説をご紹介します。宗雪は俵屋宗達の後継者で、その弟とも弟子とも言われるが定かではありません。宗達存命中は、工房を代表する画工の一人だったと考えられ、宗達没後は工房印である「伊年」を継承し自作に用たため、昭和五十年代まで宗達としばしば混同されました。

寛永十六年（一六三九）堺の養寿寺の杉戸絵を描き、寛永十九年（一六四二）頃には法橋となり、同年加賀藩三代藩主前田利常の命で、八条殿内の御内儀御殿化粧之間、客之間の襖絵を描いています。寛永二十年（一六四三）から正保初め頃に金沢に下り、前田家の御用絵師となり、慶安三年（一六五三）には狩野探幽と共に、前田利治の江戸屋敷に草花図を描いています。今回展示している宗雪の「群鶴図」（石川県指定文化財）は、宗達風の様式に狩野派の筆法を加味した表現が注目されます。

宗雪の工房は、喜多川相説が継いだと考えられています。金沢地方には宗雪の後継者が制作した多くの伊年印草花図屏風が残されており、その伝統は江戸時代末頃まで続きました。尾形光琳も宗雪や相説の様式に倣った草花図を制作しており、この両者は光琳の画風にも大きな影響を与えています。

石川県指定文化財　俵屋宗雪「群鶴図」
（右隻）　江戸17世紀

第３展示室

知られざる鴨居 玲

9月1日（土）～10月21日（日）　会期中無休

今回の特集では、鴨居の没後アトリエの壁に未完のまま掛けられていた小品を、集合的に展示してみました。これらが、果たして完成を目指したものなのか、あるいはエスキース的な、つまり下絵的なものだったのかは、判断が難しいところです。何点かキャンバスの裏に作品名が筆で記されているものもありますが、表の絵とはかけ離れたタイトルで、おそらく、いったん完成した作品をつぶすか、上書きし、別のテーマで描き出したと思われます。レントゲンで撮影してみたい衝動に駆られます。

緑色を全面に塗って、線で人体を描いた絵もあります。鴨居の絵の道具に、蓋付きの大きな筒状の入れ物が何本かあるのですが、これに緑や茶色を薄く溶いた絵具を入れて、刷毛でキャンバスに施すというのが、鴨居の制作の初段階でした。

姉の鴨居羊子が玲の制作の様子について書いた一文があります。

概略は、「緑や赤に塗られたキャンバスが、アトリエに放置され、そのむらむらからイメージが形作られていき、またしばらく放置される。それがいつの間にか一気呵成に完成されている」というものでした。

今回展示した未完の絵も、そのように放置され、ある日来る完成の日を待っていたものなのでしょう。ただし、どれがとは、鴨居自身もおそらく知らぬままに、九月七日未明の死を迎えることになったと思われます。

コレクション展示　今月のみどころ

9月1日（土）～10月21日（日）　会期中無休

第4展示室【彫刻】
小特集「ぐるりと廻ってながめてみよう」

現在展示中の「小特集 ぐるりと廻って眺めてみよう」では、今までの展示のように作品正面とされる面を表に向けて壁に沿って並べるという感じの展示から、各作品をなるべく中の方に移動させて展示し、今まで意識すること少なかった作品の裏側や背中側をもご覧いただこうとするものです。展示構成は「人体彫刻」・「空間と構成」・「フォルムと空間」・「鏡面素材と空間」・「外と内の相」・「正面性と彫刻」の六つのコーナーにより、いろいろな角度や視点・観点から彫刻作品を眺めていただこうとするものです。立体芸術であり空間造形であり、さらに材質芸術でもある彫刻の多様性をお楽しみ下さい。

「スパイラルリング　#3」木戸　修

第5展示室【近現代工芸】
今月の展示作品より　橋本仙雪「蘇芳染竹網代飾箱」～正倉院御物の技術を再現～

昨秋の特別陳列「竹工芸・橋本仙雪　―古典とモダンのはざまに―」には、橋本氏と親交のあった地元の方をはじめとして、たくさんの方々にご覧いただきました。今回第5展示室では、代表作の一つ「蘇芳染竹網代飾箱」を展示しています。

蘇芳で染めた竹と素の真竹を用いて、四つの四角が入れ子になった四角の連続模様は、正倉院御物「漆縁籧篨双六局龕（ぬりぶちきょじょのすごろくきょくのがん）」の竹編み組みを研究し、復元したものです。模様を繋げながら箱型に編み上げた、側面に継ぎ目のないシンプルな形が濃淡の模様の美しさを際立たせています。古代作品を再現することで、古の工人の心を伝えたかったという、橋本氏の思いが込められた作品を、この機会にぜひご覧ください。

「蘇芳染竹網代飾箱」橋本仙雪
昭和54年　第26回日本伝統工芸展

第6展示室【日本画】
「日本画　空のかたち」

十点の館蔵品から日本画が空をどのように扱ってきたかを垣間見る小特集「日本画　空のかたち」。初夏の白山を描いた、少々季節外れな「白山図」と季節感たっぷりな「山の秋」の二点を展示しています。どちらも作者は玉井敬泉。敬泉は白山の国立公園への昇格に尽力するなど、生涯白山を愛し描き続けた画家です。同じ画家による同じ山ですが、季節の違いが山の景色や空模様、色使いにはっきりと現れており、興味深いものがあります。季節が違うため、コレクション展示室では二作を並べて展示することはあまりありません。この機会に比較鑑賞も楽しんで下さい。

玉井敬泉「白山図」（部分）

キッズプログラム　夏休み各講座

夏休み　親子　体験講座

毎年たくさんの方にご参加頂いている夏休み体験講座。今年は低学年の「絵の具マジック！」と高学年の「ラッキーデザインで九谷焼」の二講座、それぞれ午前、午後の二回行われました。まず、七月三十日（月）に小学校一年生～三年生親子参加の講座、「絵の具マジック！」。絵の具といえば筆での表現が普通ですが、今回は筆以外のいろいろな道具を使っての表現に挑戦です。いろいろな道具とは、ビー玉、縫い糸、網、歯ブラシ、綿棒など意外と身近な道具です。これらの道具と絵の具とで生まれたふしぎな模様をコースターに仕上げます。筆ではない道具と絵の具で生まれる表現が初体験の参加者の方も多く、その楽しさに夢中になって作品作りに取り組む皆さんでした。

八月三日（金）は、小学生四～六年親子参加の講座、「ラッキーデザインで九谷焼」ということで県立美術館では恒例の工芸体験です。展示中の古九谷にある吉祥文様を今風に「幸せをもたらすラッキーアイテム」と称してワークシートを使って鑑賞しました。その後、気に入った模様をスケッチし作品制作へとつなげます。今回は能美市の九谷焼陶芸館のご協力を得て十二センチの角皿に吉祥文様などラッキーになれるデザインでの上絵付けに取り組みました。展示室での古九谷の作品のスケッチから上絵付けと継続して熱心に取り組む参加者の方々。スケッチの活動を経ることでじっくり鑑賞でき、また、自分でも制作することで古九谷のすばらしさを実感できたとの感想も寄せられました。

夏休み　親子　鑑賞講座

八月五日（日）、小学生親子の鑑賞講座「アートゲーム大作戦2」が行われました。夏休み親子で楽しむ美術館「きこえてくるよ」の展示室で作品から感じるセリフを考えたり、作品から受ける印象を擬態語で表したりするゲームでスタート。その後、展示作品に描かれている人物を取り出した画像をパネルにし、「あなたならどこに配置する？」と考えるゲームにも取り組んでみました。締めくくりは前回のアートゲーム大作戦でも大好評だった「美術館ミステリーツアー」。親子ペアになり一人がアイマスク、もう一人は自分のお気に入りの作品の前までご案内してどんな作品か説明します。アイマスクの人は説明からどんな作品か想像するというゲームです。今年も一番人気の活動となりました。

今回の鑑賞講座は、夏休みという期間でのゲームを取り入れた活動ということで、はじめて美術館に来られた方や小さいお子さんの参加も多く、美術鑑賞のスタートとしても楽しんで頂ける講座となりました。ご参加頂いた皆様、ありがとうございました。

平成24年度兼六園周辺文化の森

ミュージアムウィーク

10月1日（月）～10月8日（月・祝）

今年も兼六園周辺文化の森では十月一日から八日間、ミュージアムウィークが設定されます。当館を始め、歴史博物館、能楽堂など十七の文化施設では講演会やギャラリートーク、ミニコンサートなど盛りだくさんの行事が予定されています。また本多の森公園では、例年好評の文化の森カフェや、県内各地の民俗芸能の講演も予定されています。

当館関連行事

◆特別講演会

日時／十月七日（日）十三時三十分～

会場／美術館ホール

「古九谷　再考　～デザインの勝利～」

講師：嶋崎　丞（当館館長）

電話またはFAXにて十月五日（金）までにお申し込みください。入場無料です。（先着二〇〇名）

石川県文化振興課

TEL／076－225－1371

FAX／076－225－1374

◆常設展ギャラリートーク

時間／十一時～

会場／常設展示室（常設展観覧料が必要）

十月二日（火）　特別陳列「尊經閣文庫名品展」を当館学芸員が解説します。

十月四日（木）　特集展示「秋の優品選」を当館学芸員が解説します。

十月六日（土）　当館館長が常設展全体を総括的に解説します。

十月八日（月・祝）特集展示「知られざる鴨居玲」を当館学芸員が解説します。

ミュージアムショップ通信

九月一日にオープンした須田国太郎展も十月十四日の会期終了が見えてくる時期となりました。いぶし銀のように渋い画面は、見れば見るほど味わいが増し、再度訪れる鑑賞者の方も多いようです。この須田国太郎展、図録だけでなく絵はがき、B6ノート、マグネットなどの関連グッズがあるのをご存知でしたか。どれも手頃でお求めやすくなっています。この機会にショップも覗いてみて下さい。

十月の行事予定

◆企画展「須田国太郎展」ギャラリートーク11時～　一階企画展示室

10月は7日、14日の日曜日開催。須田国太郎展観覧料が必要です。

◆「百万石の文化講座」第3講　13時30分～　美術館ホール　聴講無料

14日（日）「石垣の伝統技術を探る」講師：木越　隆三氏（石川県金沢城調査研究所副所長）

◆土曜講座　13時30分～　美術館講義室　聴講無料

13日（土）「飛鳥彫刻と止利仏師」　学芸第一課長　谷口　出

20日（土）「よくわかる日本画　―日本画誕生前夜―」　普及課主査　前多　武志

※ミュージアムウィーク関連行事は上記をご参照下さい。

ご利用案内

コレクション展観覧料

一　般／三五〇円（二八〇円）　大学生／二八〇円（二二〇円）　高校生以下／無料

※（　）内は団体料金　毎月第一月曜日はコレクション展示室無料の日（十月は一日）

十月の開館時間　午前九時三十分～午後六時　カフェ　営業時間　午前十時～午後七時

十月の休館日は二十二日（月）～二十四日（水）です。

秋宵　しゅうしょう　昭和9年（1934）　縦133.7cm×横138cm　紙本　二曲一隻屏風

所蔵品紹介228

紺谷　光俊　こんたに・こうしゅん　明治23年（1890）～昭和20年（1945）

二枚折りの屏風に円窓を設け、月に見立てた瀟洒な作品です。写真ではわかりにくいのですが、簾で仕立てられた円窓には、秋草も描かれています。「秋宵」の題が表すように、時間的にはまだ日が暮れて間もないのでしょう、月の位置は低く構えられ、「武蔵野図」を思わせます。しかしよく見る「武蔵野図」では、基底線を意識した真横からの構図や、整理された意匠性の高い表現が特徴です。対して本作では、砂子は用いられているものの、装飾性や意匠性は抑えられています。秋草や白い狐の卓抜した写実表現、そして空間を意識した構図が目を引きます。そこは、やはり作者が高村右暁や山本春挙につき、円山派を学んだバックボーンが影響しているのでしょう。

作者の紺谷光俊は、美人画を得意とした金沢の画家です。初め四条派の高村右暁に学び、その後数年間、京都に出て円山派の山本春挙に師事します。大正六年、金沢に戻り制作活動に励み、金城画壇において役員や審査員を、北陸美術協会では評議員をつとめます。また精力的に後進の指導に当たるなど、金沢の美術発展に貢献しました。

次回の展覧会

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第2展示室	第4展示室	第5展示室	企画展示室
特別陳列 加賀藩の美術工芸	石川県の名宝 ―国宝・重文・県文―	特別陳列 能登の彫刻家たち	特別陳列 生誕100年記念 寺井直次の漆の美	第59回 日本伝統工芸展金沢展 会期：10/26(金) ～11/4(日)
会期：10月25日(木)～11月28日(水)				

広告

明治10年8月、
加賀藩 前田家の出資により創業。

金沢支店／〒920-8686
金沢市南町5-28　TEL.076-263-5131

◉金沢第十二国立銀行開業免状の写
（北陸銀行金融歴史資料館蔵）

www.hokugin.co.jp

お客さまの「うれしい」を、私たちの「うれしい」に。北陸銀行

石川県立美術館だより
第348号（毎月発行）
2012年10月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076（231）7580
Fax:076（224）9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています